

中国の仏教を訪ねて（その1）

林 智 康



本師曇鸞和尚は

仙経ながくやきすてて

浄業さかりにすすめつつ

魏の興和四年に

菩提流支のをしへにて

浄土にふかく帰せしめき

玄中寺にぞおはしける

遥山寺にこそうつりしか

（『高僧和讃』曇鸞讃 『註釈版聖典』582頁・583頁）

本師道綽禪師は

唯浄土一門を

鸞師のをしへをうけつたへ

在此起心立行は

聖道万行さしおきて

通入すべきみちととく

綽和尚はもろともに

此是自力とさだめたり

（道綽讃 同588頁）

「玄中寺」の左訓（高田専修寺蔵 国宝本）

曇鸞の造らせたまひたる御寺なり。道綽は鸞師の御弟子なり。この寺に道綽はつぎておはしましけり

「在此起心立行」の左訓

娑婆世界にて菩提心を起し行を立つるはみな自力なりとするべし

私の勤める龍谷大学の真宗学会研修旅行において、教員6名、学生（社会人を含む）30名の計36名で、去る9月8日から11日まで、3泊4日の日程で中国を訪れました。

まず、関西空港から約2時間（1時間の時差）をかけて北京空港に到着し、バスで北京市内の広済寺にある中国仏教協会の本部を表敬訪問しました。そこで中国仏教の現状と中国各地にある寺院の復興について聞くことができました。参加者の中から、仏教の研究や伝道について鋭い質問が出されました。広済寺は北京で最も古い寺院の一つです。13世紀の金朝末期にこの地に西劉村寺が建てられ、明代の成化年間（15世紀後半）になって

再建、その後に弘慈広済寺と改められました。多宝殿には、日本の各宗派から贈られた記念品などが陳列されており、仏教界における日中友好が進められていることを感じました。私たちも持参した龍谷大学所蔵の善本叢書『三帖和讃』、『仏教文化研究所紀要』、『真宗学』、それに4年をかけて6人で著した『親鸞読み解き事典』を記念品として寄贈しました。天安門広場に少し立ち寄って写真撮影をしましたが、30年前に訪れたときと建物はあまり変わりませんが、車やバス、人の多さには圧倒されました。

次に、再び北京空港に戻り、国内便の飛行機に乗り約1時間半かかって山西省交城県の太原に向かいました。そして翌日、バスに乗って中国浄土教の発祥地である石壁山玄中寺をめざしました。ここは曇鸞大師（476～542年）・道綽禪師（562～645年）・善導大師（613～681年）の三祖ゆかりの寺です。長い間所在が解りませんでした。大正9（1920）年、常盤大定博士が苦勞して玄中寺を探しあてられました。玄中寺は中国改革（中華人民共和国の成立 1945年）後、最初に復興された寺院といわれています。やがて岩山の頂上に宋代建立の白塔が眼に入り、駐車場を降りて少し坂道を歩いたところで、「永寧禪寺」および「浄土古刹」の額が山門に掲げられていました。

玄中寺は北魏の曇鸞大師が建立し、随の道綽禪師が再建されました。唐代には律宗、宋代には華嚴宗、元の初めに禅宗と改められました。大雄宝殿の主尊は阿弥陀如来像で、尊前で「讃仏偈」を唱和し、また近くにある三祖堂では「正信偈和讃」を力強く唱和しました。参加者全員が初めて玄中寺を訪れ、その上「正信偈和讃」をおつとめしたことは、それぞれ深い感動を持ったものと思われれます。

昭和31（1957）年、東本願寺から曇鸞大師の絵像（中央）、西本願寺から道綽禪師の絵像（向かって右側）、知恩院から善導大師の絵像（向かって左側）が贈られ、三祖の像の後に掲げられています。この玄中寺においても前述の『三帖和讃』などの記念品をお贈りしました。お返しに『往生論註』の刊本と『浄土古刹』のDVDを頂戴しました。

続いて次の訪問地五台山に向かいました。

（つづく）

（龍谷大学教授：真宗担当）